



第一章 世の中安穩なれ

思い返せば昭和十五年七月、時の政府の命によって『聖光』『光明』両誌が廃刊せられました。その時ばかりは本当に悲しかった。それがこのたび再び出ることになりました。私も嬉しい。しかし、待ちこがれていてくださる御同胞はもっと喜んでくださることを知っています。敗戦国になっても我らは宗教の自由、個人の人格の尊厳等、高価なものを得ることができました。けれども、もし内に真実の自覚なく、醜い人間の煩惱ばかりがものをいったのでは、決して真の社会的自由はあり得ない。このとき再び私の月々の便りが会えない友のもとに届くと思えば、嬉しくてならない。親鸞聖人の『御本典』は、日本歴史の富士の山、この山より流れ出る如来浄土の清水が私の魂を育ててくださる。幸いに有縁の友の念仏の心の中に一流の宝水を注ぎ得るならば、これに越す幸はありません。

(昭和二十三年一月)

一 光明

人は光明がなくては生きられぬ。であるから、人は何かに光明を認めて生きているのである。光とは何であるのか。君が光というのは何であるのか。その答え一つが君の価値を決定するであらう。

貧しい者には、金こそ光である。何とか生きていける者にとっては、名^{みやうり}利の満足こそ光である。病む者にとっては全快こそ光である。そして君にあつては何が一体光なのであらうか。

光を求める者は、自らが暗黒の中にいることを感ずるがゆえである。暗いから、光を求めるのである。甲が金の中にいるから安心を感じ光を感じている時、乙は、金の中にいつつ不安を感じ暗^{ぐみ}を感ずるのである。であるから、暗を感ずるといふことは、その人の精神生活の深さに比例するのである。

動乱そのものの人生にあつて不安を感ぜず悩みを感ぜず、苦しまずして生きていけることが、凡夫^{ぼんぷ}の悲哀である。悩まず苦しまず求めないがゆえに、真の光明が、何であるかを知ることができない。悩みに打ち当たつたものは幸せである。人生の暗黒が身にしみて感ぜられる人は幸